

5. 地域の居場所づくりにおける暮らしの再構築

松本市地域づくりインターン第3期生・庄内地区担当 中島 麻衣

1. 地域社会の現状

現在、地域社会を取り巻く環境が大きく変化する中で、そこで暮らす人々の生活の困難が顕著にみられるようになってきているのではないだろうか。

例えば、子どもの育つ環境についてみてみることにしよう。子どもの遊び場は、かつては外遊びが主流であったところから、現代ではインターネットやゲーム機の普及も影響し、家の中で遊ぶ子どもが増えている。小木美代子ら(2005)によれば、『外遊び』の時間は、子どもたちが大自然や生き物と触れ合い、代々継承されてきた遊びのルールを身につけ、集団のなかで挫折も含めた多様な体験をしながら、からだも心も“人間になっていく”という豊かな『子どもの文化』の時間だった」と指摘しており、「子どものメディア接触は、室内で、しかも多くの場合、一人でテレビ…パソコンなどに向きあうことになる。子どもがからだと心を育てるべき『子ども期』に、部屋にこもって、人と言葉を交わさずに長時間過ごす」ことになると指摘している。かつては外で仲間と共に、自由に遊びを創造していく中で自然と心身ともに成長・発達していたのであるが、バーチャルな空間に置き換わることで、子どもたちの生活体験の機会が失われ、遊びもまた個別化していくことになる。

そしてネット社会による夜型の生活や睡眠不足、朝食の欠食などが起こり、これらの現状を瀧井宏臣氏は「ライフハザード(生活破壊)」と表現している。このような例から見ても子どもの育ちの危機が叫ばれている時代になってきている。

さらには子育て中の親にも生活のしづらさが広がっている。かつて、三世同居や向こう3軒両隣に見られるように助け合いの精神がもたれていた時代には、地域で子育てをすることが自然と行われていた。しかしながら、次第に核家族化に見られるように、家族の単位が小さく、そして多様なものになってくると、母親は子育て

を手伝ってもらえる存在が身近にいないために、子育ての息抜きがしづらい環境にある。小出まみ(1999)によれば、「子育て期の親が孤立感を覚えるのは子連れで出かける場が限られ機会が少ないことによる。この時期の親たちが欲しいのは、子連れで安心して出かけられ、行けば必ず仲間に出会え、ちょっとしたことが相談できる人がいる場である。中でも仲間である。」と述べられており、孤立感の解消がされない結果、育児ストレスが溜まり、精神的に病んでしまったり、最悪の場合、子どもに対して虐待をしてしまったりと、親にも子どもにも良くないことが起こってきている。

一方で、地域の高齢者においても、要介護(要支援)認定者の増加、独居高齢者や認知症高齢者の増加、またそれに伴う介護において、高齢者が高齢者の介護をするという老老介護が増えている。身体に不調が増えれば、外へ行くのも億劫になり気持ちが閉じこもってしまって、孤立を抱える高齢者が増えている。

このようにしてみると地域社会の構造変化に伴って、人間関係の希薄化が進む中で、多様な世代の人たちが地域の中で孤立を抱えてしまっていることによって、さまざまな生活課題が現れてきているのではないか。このような地域社会の現状があるとすれば、子どもや高齢者など地域に住むすべての人が心豊かにいきいきと暮らしていくためには、地域の人との関係性や社会資源との間の関係性を編み直していくことが求められるのではないだろうか。

2. 庄内地区の現状

2-1 地区の概要

庄内地区は松本市の東南郊外に位置し、土地区画整理事業による大型商業施設や宅地造成等、「新しいまちづくり」が進んでいる地域である。人口は松本市で4番目に多く、高齢化率は22.1%で市平均27.1%より5%低い(平成30年1月1日現

在)。町会によって人口・世帯数共に大きく異なるため、子どもの数や高齢化率にも差があり、役員の担い手不足の声も挙がっている。

地区には松本を南北につなぐ主要道路があり、交通の要所としての便も良い。一方で東日本最古といわれる国の史跡弘法山古墳や多くの重要文化財などの歴史的遺産が今でも多く残り、歴史の移り変わりを伝えている。また、かつて農業が主体であり、松本一本ねぎの発祥地であるなど、自然や農業も残っている。

地区は薄川と田川に区切られており、そこに逢初川、松巽川に代表される中小河川が多く流れ込み、平時は水の恩恵を存分に受けているが、古くから洪水の被害に遭っており、台風や豪雨のたびに水害に悩まされている。そのため、被害を食い止めるための遺構や祈りの風習が残されている。

そして庄内地区は子育てに力を入れているのが魅力である。地区公民館には「子育て委員会」という独自の委員会があり、未就園児の親子を対象に子育ての息抜きや相談、他の親子との交流ができ、子どもたちはのびのびと遊ぶことのできる「ちびっこひろば」を毎月開催している。また、子ども会育成会の取り組みの中の「三九郎講習会」では地区のPTAにやぐらの組み立て方を講習すると同時に小学生にも組み立てを体験してもらい、夏に行われる「やまびこ子どもまつり」では企画・準備から小学生を交えて行っている。その他、地区の有志が集まる“庄内盛々会”が子ども会行事や公民館行事に積極的に協力している。あわせて庄内地区はイベントや行事が盛んでもあり、年に一度の大イベント「ドリーム庄内“秋のつどい”」が今年度で10回目を迎えた。今回は9回目に引き続き地区の特性を活かした「防災運動会」を実施し、記念企画として気球搭乗体験も行った。

2-2 地域課題

庄内地区の地域課題として、以下の3点が挙げられるのではないかと考える。

(1) 防災

庄内地区は牛伏寺断層を震源とする大規模地震や、河川の氾濫による水害被害が起りやすい地域であるため、2.1「地区の概要」においても述べたように、防災は切り離せない課題である。

そのため、防災訓練の実施や、水害に遭った際の写真や記事を町内公民館に掲示している所がある等、防災への意識が高い町会が多い。

平成26年7月に庄内地区まちづくり協議会(以下:まちづくり協議会)を設立してから、「防災」は継続的な課題として取り組んでいる。今日、人間関係の希薄化や地域活動へ無関心な人が多いことから、地域コミュニティは厳しい状況にある。そのため一層、防災の重要性が問われている。これまで防災委員会において、防災マップの作成・全戸配布、防災体制や設備等の再確認や各町会において町会緊急避難場所の設定、指定避難所(地区内5ヶ所、地区外1ヶ所)ごとに避難所運営委員会の立ち上げに向けた協議や避難所運営マニュアルの作成などに取り組んだ。

今年度の取り組みとしては、先でも述べたように「ドリーム庄内“秋のつどい”」において水害を想定した防災運動会の実施や、講師を招いての防災研修会や地震体験車の他、平成28年度に作成した「避難所運営マニュアル」に基づき筑摩小学校において第1回避難所運営訓練を11月に実施した。この時、活動班と一般避難者に分かれ、活動班はダンボールベッドの組み立てや給水訓練、一般避難者は市の防災出前講座を受講した。参加者のアンケート結果から、参加者自身が人命救助の方法や避難所における役員の入れ替わりシミュレーションなど、体験形式で実際に行う訓練をしたいという意見が多く挙がり、防災についての意識の高さがうかがえた。一方で、「長時間座っていると疲れる」「寒すぎるから時期を変えてほしい」という意見もあったが、本当に災害が起こった場合は訓練以上に精神・体力共に酷使されるだろう。災害時に助け合えるためにも、日頃から地域での見守りや防災への備えを意識し、「自助」、「共助」、「互助」の取り組みが重要である。

(2) 地域包括ケア

地域包括ケアシステムの構築は国が進める重要施策の一つで、松本市でも積極的な取り組みが行われている。「誰もが庄内地区で安心して暮らし続ける」ために、医療や福祉・行政・地域の連携が不可欠である。地域包括ケアの背景として挙げられるのは、超少子高齢型人口減少社会の進行、認知症や独居高齢者の増加、介護の担い手不足、身近な地域での繋がり希薄化等の課題

がある。

今年度まちづくり協議会において地域包括ケアを地域課題として設定し、委員会を立ち上げ、講師を招いての認知症勉強会や個別ケース事例検討会の開催、地域ケア会議への出席等を行った。地域ケア会議は“地域の問題を自分のこととして考える”をテーマに、想定事例について地域住民・専門職・行政ができることをそれぞれの立場で検討した。

認知症勉強会におけるアンケート調査では、「不可解な行動には必ず意味があると意識して接していきたい」「地域でどの様に支え合うか、これからの課題としてとらえなければいけない」などの意見が挙がった。認知症についての理解を深め、身近な地域で考えていくべきこととして地域の人々にとって再認識ができたのではないだろうか。

なお、前述の(1)防災、(2)地域包括ケアについて、まちづくり協議会では、課題ごとに専門委員会を立ち上げ、具体的な活動に取り組んでいる。その一方で、向こう3軒両隣の関わりが希薄している現代だからこそ、他人事ではなく「我が事」として再度地域と自分自身を見直し、同じ地域に住む人々と支え合うために地域でできることや自分ができることは何か、一人ひとりが考えていく必要がある。

(3)地域と子どもの関わり

核家族化やインターネットの普及等、子どもを取り巻く環境が変化していることは、1「地域社会の現状」でも述べたが、そのような状況の中で地域との関わりや伝統行事の伝承が少なくなり、子どもが「体験する機会」というものが失われつつある。近年、防犯の意識から、地域の人と子どもが挨拶を交わすことすら難しくなっているため、交流を図ることはさらに困難である。また、外遊びが減少したことにより、子ども同士でコミュニケーションをとることが苦手な子や、外で遊ぶ力が弱まってしまいう子もいる。

そういった現状もあるが、庄内地区は子どもと地域の人々が関わる機会が多いことを強みとしている。2-1「地区の概要」でも述べたように、子どもが楽しみながら主体的に関われる取り組みが多い。さらにコミュニティ・スクール事業が取り組まれていることもあり、今後より一層子どもと地域の人々が関わるニーズも求められる。

このことから、子どもを家庭や学校のみならず「地域で育てる」という意識や取り組みが必要だと痛感する。

3. 研究の趣旨

3-1 研究の目的

地域社会と庄内地区の現状等より、本論文では、子どもや高齢者など地域に住むすべての人が心豊かにいきいきと暮らしていくための条件とは何かを考える。私たちは暮らしを形作る上で、必要な社会資源(ヒト・モノ・情報・仕組みなど)を選択し、それらとの関係をつくりながら、暮らしを形作っている。しかしながら、それらとの間の関係がほころびをみせていくと、暮らしが貧困なものになっていってしまうことになる。

子どもの頃の記憶は大人になっても時折鮮明に思い出されるものである。そのため、子どもの頃にどのような体験をしたか、どんな人に出会ったか、どんなことがあったか、という思い出は、自分の人生において良くも悪くもその人の人格を形作る基礎となる。高齢者においても、例えば外に出る機会が減ることで、友人や隣人との接触も減り、コミュニティ(生活空間)が小さくなっていってしまい、生活が貧困なものになっていってしまう。

このようにいえるとするならば、課題解決のためのアプローチとしては、地域で暮らす人々が自分らしい暮らしを選択していけるだけの社会資源を発掘するとともに、それらと人々の関係をつむぎ直していくことが求められるのではないか。またこれらの暮らしの関係性の再構築のためには、地域の中に「信頼」しうる関係を取り戻していくことが不可欠なのではないだろうか。

3-2 実践の方法

では、人々が「自分らしくいられる暮らし」とは何なのだろう。コミュニティの縮小が懸念されている現代において、地域に住む人々の「暮らしの一部となっている居場所」に着目する。その居場所は心豊かな生活に繋がるのか、以下の二点を具体的に研究する。

一つ目に、並柳団地町会で実施されている子どもの居場所事業「なみカフェ」に関わり、身近な地域で“子どもの居場所”をつくる必要性とは何か、また子どもたちの現状と変化を調査する。

二つ目に、地区公民館や町会での活動に参加し、地域の実情を知ると共に、人々の暮らしのそばで居場所(交流の場所)を作ることによる住民同士の繋がりや、居場所があることが暮らしにどう関わるのかを調査する。

4. 実証研究

4-1 子どもの居場所事業「なみカフェ」

(1)事業の概要

並柳団地町会で行われている子どもの居場所事業「なみカフェ」は、長野県県民文化部こども・家庭課の子どもの居場所づくりモデル事業(信州こどもカフェ事業)を非営利活動法人長野県NPOセンターが委託を受け、平成28年7月に開始した。今年度は県が撤退し、「松本市子どもの未来応援事業」として松本市こども部こども福祉課により支援が引き継がれている。

事業開始のきっかけは、町会長の「放課後様々な理由で児童センターに行かない(行けない)子どもたちが団地内に多く見かけるため、何とかしたい」「暗くなっても外で遊んでいる子どもが気になる」という話を、NPO法人ワーカーズコープ松本事業所の所長が覚えていたことから、「一緒にやってみませんか?」という話になり、協議を重ね、開始に至った。

なみカフェに関わる団体は、松本市で6ヶ所児童館・児童センターを運営するNPO法人ワーカーズコープ松本事業所(以下:ワーカーズコープ)をコーディネーターとして配置。松本市こども福祉課、子どもみらい基金、松本空港ロータリークラブ等から寄付金や寄贈品、NPO法人フードバンク信州による食材支援と町会のボランティアによる調理支援、松本大学の学生が学習支援や遊びの助長を行っている。他にも松本友の会からボランティアにきている方によるお菓子作りや物づくりの体験、研修や見学に来る人もおり、活動に共感・協賛して関わる団体または個人も増えている。

そうした中で、私は4月から「コーディネーター補佐」という立場で、運営の主体を順次地元に移していくという役割を担い、本事業の運営に関わっている。

(2)事業の内容

①「なみカフェ」オープン

今年度は月に約4、5回、計50回並柳団地集会所を拠点として実施し、保育園児から高校生まで幅広い参加が見られた。時間帯は水曜日16時～19時、土曜日や長期休み中は10時～13時半までとし、学習支援や体験学習、学生と一緒に思いきり遊ぶことによる心の解放、町会スタッフによる食事提供などを通し、子どもに寄り添うこと、表情や些細な変化に気づくことを大切にしている。

夏休み前までは土曜日と水曜日をバランスよく設定していたが、学校が終わってからそのまま来ることができる水曜日に参加者が多い傾向にあったため、夏休み以降は水曜日を主に設定した。友達を誘って来る子どもも増え、平均参加者は初秋から各回約14人と春夏の2倍になっている。

②課外学習 バスハイク

9月に初めての試みとしてバスで開田高原に行った。開田高原で多世代交流に取り組んでいる「つどい場きらくや」との交流、大自然の中で木曾馬に触れる体験、開田高原の新鮮な野菜でバーベキューを目的とした。

実際に馬に触れ「あったかい」と言う子、毛並みを感じる子、草をあげる子など、生きている動物を間近で見て、触れることができたのは貴重な体験であった。馬と触れ合っている時の子どもの様子を見て、心の優しさが感じられた。また、普段のなみカフェでは公園でサッカーをしている子どもたちも、この日は広々とした場所でサッカーができ感激し、のびのびとしていた。

町会長も「子どもたちのあんなに楽しそうな顔は初めて見た」と話し、最後に撮影した集合写真ではみんなの本当にいきいきとした優しい笑顔を見ることができた。バスハイク後のなみカフェでも、「次はいつ行くの?」「外国に行きたい!」という声も飛び交い、来年度も計画しようと話した。

③季節のイベント、伝統行事の開催

今年度、クリスマス会やおもちつき、三九郎のまゆだま作りなどの季節行事も行った。クリスマス会では子どもたちのやりたいことを聞いて計画し、みんなでケーキ作りやビンゴ大会を行った。何週間も前から「今日ケーキ作る日?」と聞いてくる子どももいて、クリスマス会を楽しみにしている様子がうかがえた。

おもちつきに関しては、並柳団地に住む外国由来の方々に日本の伝統行事を体験してもらうことと、杵と臼を使って行う家庭が少ない(団地内ではほとんど見られない)ことから、神田町会長から杵と臼を借りて行った。当日はブラジル出身の男の子が進んでおもちをついてくれ、その様子を見ていた母親と妹にも一緒におもちつきを体験してもらうことができた。

まゆだま作りは地区行事の三九郎と連携して行った。普段なみカフェに来ていない子どもたちもこの日は見えた他、PTAの保護者との交流もできた。昼食の時は子どもと大人が入り混じり普段以上に賑やかな声が聞こえた。さらに親子で来ていた家庭もあったため、母親と一緒にごはんが食べられて嬉しそうな子どももいた。

(3)実践の中で向き合った事例

①子どもたちとの関わり

子どもたちとの関わりにおいて、最初から懐いてくれる子もいれば、話をしてくれない子もいた。急に来るようになった私にとまどう子、様子を伺う子もいたのだろう。中には自分が原因で子どもと壁ができてしまうこともあった。また、子どもたちに悪気はないとわかりつつ、子どもの言葉に傷つき私から壁を作ってしまうこともあり、何ヶ月もぎくしゃくした関係が続く子もいた。

しかし子どもたちと関わる中で、一人ひとりの良い所が見え、みんな本当は素直で優しい子たちだと心から感じられた。大人を“試している”部分もあるのだと、ワーカーズコープの方は言った。そのうち子どもの態度や一面でその子を判断したり偏見をもったりすることは良くないと思い、自分から壁を壊さない限り相手も心は開いてくれないと気がついた。それからは今まであまり話せなかった子どもたちとも少しずつ話したり、一緒に遊んだりするようになった。

最近私のことを名前でも呼んでくれる子も増え、それがとても嬉しく感じる。また、私がみんなに話したいことがある時は高学年の子が「静かに!」と呼びかけてくれる姿もあり、初めの頃と比べたら、少しずつ子どもたちと関係を築けているのではないかと感じる。

②スタッフ間の思い

なみカフェに関わるスタッフのうち、調理に

携わってくれる町会の方は3人いる。3人とも味つけの仕方など衝突することもあるが、一心同体という思いをもっている。しかし、思いが強いため不満を抱くこともあり、運営に関することや子どもたちへの対応について、また調理の進め方に対する不満などが度々挙がった。

8月末、調理スタッフのAさんとワーカーズコープの方との間で衝突があった。その時は双方の誤解もあったのだが、最初にAさんが私に電話で「町会長にも言わないでほしい」と出来事と思いを話してきてくれた。Aさんから「言わないでほしい」と言われたが、それでも町会長には相談すべきだろうか、とても悩んだ。結局町会長に相談し、お力を借りて結果的に解決に繋がった。

その後も町会の方々が不満を抱えているのではないかと感じることもある。振り返ってみると、スタッフ間で話し合いをしたり思いをぶつけ合ったりすることはなかった。一人ひとりの気持ちや考えを聞くこと、思いを表出できる関係づくりも大切だと感じた。

③勉強の時間

なみカフェでは学習支援も行うが、宿題を持ってこない子や宿題の途中で集中力が続かず遊びに行ってしまう子も多い。私がコーディネーター補佐という立場のため、周りのスタッフから「子どもたちに宿題をさせた方がいい」と言われることも多かった。6月には、学習支援の担当として関わってくれていた方々から、「学習の時間を統一して、30分だけでも机につくようにしましょう」という提案があった。勉強といっても、遊びの感覚でできるようなものを用意してくれたり、机についていれば絵を描いたり本を読んだりしても良く、“静の時間”も大切にしたい、ということであったが、実際子どもたちに声をかけて学習の時間を設けようとしてもうまくいかなかった。その時は、子どもたちの自主性より、勉強するように強いてしまっている気がした。しかしながら、声のかけ方によっては進んで勉強する子もいるため難しいところではあり、今でも模索している。

(4)観察事例

①町会スタッフAさん

Aさんは過去に死に至るかもしれないほどの大きな病気にかかった。町会の役職に就いていたが、病院の先生から「役職だけでなく、町会で

別のこともするといいよ」と言われた。別のことと言われてもどうしよう、と悩んでいたところ、町会長からなみカフェのスタッフとしてのお誘いがあったそうだ。Aさんはなみカフェの日は休むことなく出てきており、「なみカフェに第2の人生をもらった」と話すほど、なみカフェに対する熱い思いを持っている。Aさんは町会長を命の恩人と言うほど慕っており、恩返しをしたい、と言う。「だから私にできることは協力したい」と。

Aさんは病気の後遺症で右手に麻痺が残り、上手く動かせない。しかし、なみカフェで調理スタッフとして包丁を使ったりすることが“リハビリ”になっていると言う。また、「団地の中にずっといると四角い箱に閉じ込められてしまう。引きこもってしまう」とも話し、なみカフェがあると生活も豊かになって、ありがたい気持ちでいっぱいだ、と言う。Aさんにとって、なみカフェは生きがいになっている。

②Bさん(小学校低学年)

Bさんは、一見落ち着きがない子に見える。実際なみカフェでも食事の時に席を立ったり、話を聞く時に落ち着いて座っていられなかったりする。人懐っこく、ボランティアの学生や大人に対してもよくくっついていて、時折愛情表現が行き過ぎてしまい、相手の手を噛んだり、蹴ったりするなどの行動に出てしまう。特にそういった行動は男性へ向けられることが目立ち、男親の愛情に飢えていることがうかがえる。なみカフェで思いきり甘えることができるのは良いのだが、他で同じようなことをしたら危ないということや、相手にも許容できる限度があることは少しずつ伝えなければならない。

しかしBさんは面倒見が良い部分もあり、自分より年下の子がなみカフェに来た時にその子の目線になり「一緒に遊ぶ？」と声をかけたり、ぶつかってしまった時は自分も痛いだろうに、まず年下の子を気にかけていたりする。また、私たちスタッフに対して食事の時間におかずをよそってきてくれたり、デザートをみんなに配ってくれたり、心配りをしてくれる子でもある。このように、子どもの一面だけにとらわれず、その子の良い部分に気がつくことが大切である。

③Cくん(小学校高学年)

Cくんは料理に関心のある男の子だ。家でも

家事をやっており、料理をすることも多いそうだ。普段のなみカフェで料理の手伝いをしてくれることもあれば、バスハイクに行った際は野菜を切る作業を進んでやってくれた。Cくんの姿を見て他の子どもも手伝いをし出し、Cくんから切り方を教わっていた。また、Cくんはなみカフェで出る食事に対しても、何の調味料を使ったか聞くこともあれば、「この食材ならこう調理すればおいしくなりそう」とも話す。私にも、「自分は食べるより作る専門。だからみんなには味見してほしい」と料理をしながら話してくれたこともあった。

なみカフェの中で、子どもの関心のある分野を深めたり、周りの大人が応援し、助長したりする取り組みも大切であると気づかされた。

④Dくん(小学校低学年)

Dくんはお兄ちゃんと一緒にいつもなみカフェに来ている。お兄ちゃんが外に遊びに出ると必ずぴったりくっついていき、またお兄ちゃんもDくんの宿題を見たり、食事の時にはDくんに野菜も摂るように言ったりと面倒見も良く、仲の良い兄弟に見える。

しかし最近、Dくんはたまに寂しそうに見えることがある。お兄ちゃんが友達とバスケやサッカーをしている時は近くに座ってその様子をじっと見ている。自分はまだ体も小さく、お兄ちゃんたちと対等に遊べないため座って見ているようにも見えるが、どこことなく寂しそうにも見える。Dくんが他の友達と楽しそうに遊んでいる時には良いのだが、たまに一人でぼーっと遠くを見たり、心ここにあらずのように見えたりする時がある。

何か心に思うことがあっても、表現するのが苦手なのかもしれない。そういう子どもの思いや心の叫びを敏感に感じ、少しでも表出させてあげられるようにすることも必要である。

⑤学生の関わり

子どもたちの身近な存在として大学生のお兄さんお姉さんが関わってくれることで、子どもたちの変化も見られた。なみカフェに来て「つままない」とすぐに漫画を読み始め、口数も最初は少なかった子がいる。今では私たちスタッフに対してもたくさん話をしてくれ、学生と一緒に外で遊ぶ姿はとても楽しそうにのびのびとし

ている。

他にも、子どもたちは毎回体を動かしたくて仕方がない様子で、外で対等に飛び回ってくれる学生が来ると大喜びだ。次第に、「今日は〇〇(学生の名前)来るかな?」という声も多く聞こえるようになり、学生が子どもたちにとって大切な存在で、慕われていることも明らかとなった。

子どもたちは信頼しているからこそ打ち明ける話もあり、また学生が子どもの様子で気になる点に気づき、私に情報を共有してくれることで新たに気づけることもあった。子どもたちにとって、自分を解放できる大人が近くにいることは安心に繋がるであろう。

4-2 公民館・町会における居場所

(1) 調査の概要

公民館活動や福祉ひろば事業、出張ふれあい健康教室、町会ごとに行われているふれあいサロンや納涼祭等へ参加する。地域に出て実際に地域の人々の声を聞き、困りごとや思いを聞き、また暮らしのそばにある「居場所」が人々にとってどのような意義があるのかを調査した。

(2) 内容及び観察事例

① 町会サロン

町会ごと名称は異なるが、いわゆる「ふれあいサロン」(以下:サロン)は地域住民が主体の、仲間づくり、居場所づくり、生きがいづくりのための活動である。

各町会で内容に工夫もこらしており、体と頭の体操やレクリエーション、講師を招いての勉強会や催し、茶話会などが行われている。いずれも町内公民館や集会所において行われているため、地域の人が寄りやすいことは魅力である。

サロン参加者からは、「足が痛いけど、みんなの顔が見たいと思って来た」「みんなでお茶を飲むだけで幸せ。元気が出る」という声があった。また、サロンの中で身近に住む人の話題が出たり、普段参加している人が来ないと、「今日は〇〇さんどうしたんだろう」という声も飛び交ったりと、サロンが参加者同士の安否確認にもなっている。

また、他の町会のサロンの様子が気になるという声も多かった。他の町会ではどんなことをしているのか、また各町会の悩みやサロンの運営についてなどを話し合う必要があると考える。話し合いの場をつくることで、サロンを行って

いる町会長や民生委員、有志の方々などが、町会を超えて交流を深めるきっかけにもなる。また、町会ごとのサロンの特色を知ることでもでき、各町会の今後の取り組みについての悩みの改善や発展にも繋がるのではないかと。

② 高齢者の語り場・息抜きサロン「ひととき」

Eさんは実家の商店を拠点に、認知症の人もそうでない人も集えるサロンを月1回行っている。公民館活動にも熱心に取り組み、高齢者支援を自主的に始めるなど地域のキーパーソンである。地域のことを教えてもらうため、また認知症の人も参加しているサロンは他に知らず、参加させてもらう運びとなった。

「ひととき」では参加者が参画できるような工夫をこらした内容のみならず、参加者のやりたいことを取り入れたり、参加者が「自分の家にあるもの」を使って何かできないか提案をしたりすることもある。今年度は参加者が家に咲くラベンダーを持ってきて、みんなでラベンダーの香り袋を作ったり、別の参加者がハンドベルを家から持ってきて一人一音ずつ担当して練習したりするなど、盛り上がっている。毎回、Eさんが淹れるコーヒーと手作りのお菓子も好評で話も弾む。地域包括支援センターの社会福祉士や保健士も参加しているため、血圧を測ってもらったり、健康についての話を聞いたり、相談しやすい環境も構築されている。また、Eさんのご両親が参加者と年齢が近いため参加者も話しやすく、いつも包み込むような優しさで迎えてくれるのも魅力である。

実際に認知症の方も参加しており、①「町会サロン」にも書いたように、その人がいないと他の参加者が気にかけている声も聞こえてくる。また、その人は「ここに来るのが楽しみで眠れなかった」と満面の笑みで話すほど「ひととき」での時間を楽しみにしている。

③ 公民館講座の開催

3月に地域の人と子どもが関われる場づくりと伝統食の継承を目的とした公民館講座を企画した。子育て委員会の委員長に企画案を相談したところ、「前から子どもと地域のお年寄りとが関わることはやりたいと思っていた」と言ってくれ、子育て委員会に協力して頂くことになった。話し合いを進める中で、「伝統食なら、この時期

は“やしょうま”があるよ」「ひなまつりに合わせたちらし寿司なら、ケーキのような見た目の“デコレーション寿司”を作ったことがあるよ」という活発な意見が出され、講座名を「伝統食とひなまつり～やしょうまとデコレーション寿司をつくらう～」とし、計画を進めた。

講師は、子育て委員でもあり、小学校で料理教室も行っている地域の人にお願ひし、子育て委員の皆さんと試作をし、改善策を出し合い当日を迎えた。当日は8組19名の参加者が集まり、未就学児の小さなお子さんでも簡単にでき、楽しめるよう進めることができた。

しかし、当初講座の周知・集客がうまくいかず、設定した締切日には1組2名の参加者しか申し込みがなかった。その際は、2月頭の公民館ニュースに記事を掲載し回覧板で回ったのだが、回覧板には他にもチラシが入っているため中を詳しく見ないという方や、集客を望んだ母親世代より高齢者の方が回覧を見ること、さらに町会に入っていない人には回覧板が回らないことなどが後からわかった。そのため、急遽講座の案内チラシを作成し、筑摩・並柳小学校及び児童センターに掲載依頼、地区公民館に拡大印刷を掲載、そして子育て委員会が実施している「ちびっこひろば」で声かけなどをしたところ申し込み者が増えた。参加者が集まってこそ講座を行えるので、集客の仕方は今後の課題であると感じた。

5. 考察

5-1 なみカフェを通して見えてきたことと変化

①体験の重要性

先にも述べたように、なみカフェでは学習支援や食事、遊び、会話等の中で、子どもたちに自然に寄り添うこと、子どもたちの「体験」を見守ることを大切にしている。ワーカーズコープの方が「子どもたちは体験不足にある」とよく話す。ここでいう「体験」とは、体で何かを体験することや新たな知識を覚えることなど、言葉通りの意味でしか最初は把握していなかった。

しかし活動していくうちに、「体験」には手伝いや家庭料理をみんなで食べること、言葉遣いを直すことなども含まれると気がついた。大勢で食事をすることでひとり親家庭や共働きで親の帰りが遅い家庭の子どもを孤食を防ぎ、マナー

を伝えることもでき、食事の楽しさも感じられる。その他、失敗も体験とし、子どもたちには失敗する勇気をもってもらうことや成長する上で知っておかなければならないこと(水をこぼした時の対処法など)を考えるきっかけをつくることも大切である。

②子どもの変化と自主性

なみカフェでは子どもの些細な変化に気づくこと、子どものSOSに敏感になることも重要である。なみカフェの中で、子どもたちが少しずつ変わってきたと感じることがある。宿題を持ってこなかった子どもが最近宿題を持ってくる回数も増え、自主的に机に向かい、「教えて!」と発信してくる姿もある。大人はつい口を出してしまいがちになってしまうが、子どもたちと関わる上で自主性を尊重し「気長に待つ」ことも大切だ。

また、子どもたちから学ぶ姿もある。例えばケンカをした時に「ごめんね」を言えること。大人になると謝ることが苦手になったり、なんとなく流してしまったりする場合もあるように思うが、子どもたちは自分と相手に向き合って、素直に謝ることができる心を持っている。中には荒い言葉を使う子もいるが、その子と向き合い話していくと、一人ひとりの優しい部分も見えてくる。

そして、口には出さないが何か抱えていることがあるのではないかと、子どもの表情や様子からSOSを察することも重要である。そういう時、ストレートに子どもに聞いてみても答えをはぐらかされることもあるため、どう声をかけたらいいのかも慎重に考えなければならない。

③保護者の意識変化

秋頃から、放課後になみカフェがある日(16時～19時までオープン)は保護者が迎えに来てくれることが多くなった。昨年度はいくら日も短くなくても保護者が迎えに来ることはなかったそうで、大きな進展だと町会長やワーカーズコープの方も言っている。私自身子どもたちの親の顔を知らず、関わりが全くなかったので、何か関わりをもてないだろうかと考えていた。最近保護者が迎えに来てくれるようになったことで挨拶を交わし顔の見える関係になり、次第に話す機会ができていく。母親の中には、「なみカフェ

があることは本当に助かっている。遅くまで働いている人もいるから、他の人も助かっていると思うよ」と話してくれた方もいた。

子どもの母親に、よくケーキ作りをするという方がいたため、クリスマス会でケーキの土台を作ってきてくれないかと頼んだら快諾してくれ、他の母親もブラジルのお菓子を作ってきてくれたり、子どもたちに手袋を用意してくれたりする方もいた。バスハイクやおもちつきに参加してくれる方々もおり、今年度は保護者との関わりを構築しつつあったのではないかな。今後まずは顔の見える関係をつくり、なみカフェでの子どもの様子を伝え、次第に保護者からも子どもの話をしてもらえるようになれば良いと思う。

④なみカフェの定着

先にも述べたように子どもの参加者数が増え、夏休み以降ほぼ毎回参加してくれる子も何人かいる。なみカフェは子どもたちの口コミで広がり、友達や姉弟を連れてくる子もいる。また、初めのうちは友達と一緒に来ていた子が一人でも来てくれるようになった姿もある。学校帰りに保護者がまだ帰ってきていない時「なみカフェに行っていて良いよ」と母親から言われてカバンを持ったまま来る子どももいる。

これらのことから、「③保護者の意識変化」においても考えられることであるが、なみカフェが地域の中で安心できる居場所として定着しているのではないかな。子どもが家や学校でなみカフェの話をすることもあって、子どもたちにとっての「地域の中の居場所」として確立されつつあると考える。また、地域の大人にとってもなみカフェが生きがいの場であったりするなど、大人にとっての居場所にもなっている。

5-2 公民館・町会での居場所の意義と新たなニーズ発掘

①サロンの意義

サロンの内容は各町会によって異なるが、それぞれの町会が無理のないよう続けることが大切だ。そのため、集まってお茶を飲むだけでも意義があると思う。家から出てきて地域の人と集まり、近況報告をしたり身近に住む人の話題が出たり、会話から笑いがこぼれたりする。参加者が、「楽しかった」「今回も来てよかった」

「またみんなの顔を見たい」と思えたら、サロンが地域でのあたたかな見守りになっているといえるだろう。

そしてサロンに日頃参加している人が休んだ時、どうしたのだろうという言葉が飛び交う。互いを気にかけてくれることで、自己肯定感や地域での支え合いに繋がる。サロンは身近な人たちの安否確認も兼ねており、防災の意識にも通じているといえる。

②地域での見守りと人材発掘

「ひととき」が「オレンジカフェ(認知症カフェ)」という表し方をあえてしないのは、「認知症カフェ」という名前がひっかかるのだとEさんは言う。地域のサロンの中で認知症の人も受け入れ、見守ることができていれば、地域包括ケアにも繋がると考える。

そして「ひととき」に参加する中で、独居ではないが日中一人になる高齢者の見守りが溢れてしまっていると聞いた。独居ではないため、民生児童委員の見守りからは外れてしまうという。そこで、民生児童委員の負担軽減と、“できること”を持っている人たちが困っている人に対して生活支援をするということを目的に、新たな仕組みをつくりたいという話が出た。このように、サロンの場で地域の人から地域の情報を得て、また新たなニーズや人材の発掘もできることで、地域の課題に対応することができる。

③母親世代のニーズと伝統文化

公民館講座「伝統食とひなまつり」は当初小学生を対象にしていたが、実際は保育園児の母親からの問い合わせが多かった。アンケートには、「子どもと一緒に作れて楽しかった」「伝統食を作ることは子どもにとっても母にとっても良い経験になる」などの言葉が書かれていた。また、当日には「素敵な企画をして下さりありがとうございます」と直接お礼を言われたり、「絶対またやって下さい」とも言われた。これらのことから、子育て中の母親にとって、子どもと参加できる講座のニーズが高いのではないかな、と考える。

次回以降の希望講座におやきや三九郎のまゆだま作りなどがあったことから、子どもが小さいうちから地域の伝統を学び、一緒に楽しく体験できることが求められるのではないだろうか。また、当日の試食時に地域の人が漬けた漬物が

好評で作り方を聞いている人もおり、若い母親が地域の人から漬物の漬け方を教わることも食の伝承や交流に繋がる。

世代を超えて地域の伝統文化を伝えることで、伝統も味も受け継がれていくのだろう。

6. 結論

本論文では、地域の中の「居場所」に着目し、子どもや高齢者など地域に住むすべての人が心豊かにいきいきと暮らしていくための条件とは何か、を考えてきた。

研究を進める中で、人々にとって「居場所」は無意識に形成されているのではないかと考えた。市のこども福祉課がなみカフェに来ている子どもたちに行ったアンケート調査の中で、「居場所」という単語に首をかしげる子が多かった。サロンにおいてもそうだが、参加していくうちに、次第に自分の暮らしを形成する一つの資源・要素になっているのだ。

物理的な場所だけに限らず、自分を解放できる相手や居心地の良い仲間、刺激を与え合える人々などと一緒につくられる空間こそが心がいいきいきと感じられる場である。またそういった居場所の中で自他を認めることも重要で、“自分らしくいられる”ことにも繋がる。

自分の暮らしの中にある居場所で他者との関係を築き、新たなことを学んだり自分の関心・特技を助長できたら生活の張り合いにもなる。さらに、困りごとの共有、解決策(自分ができること)の洗い出しがされれば、新たなニーズと社会資源の発掘にも繋がり、地域の人々が心豊かに暮らしていくための次への一歩にもなる。

7. 今後の展望

この1年、地域に多く出ていくことを後押ししてくれる方もいたため、地域の方々との顔の見える関係づくりができ、話をする中で抱えている思いや地域の課題を発掘することができた。また、公民館や地域で取り組まれている活動についても知ることができた。

今年度の実証研究や考察を踏まえ、今後の展望や課題を以下のようにする。

7-1 子どもの居場所に関する取り組み

なみカフェや地区公民館において、今年度の成果や課題を踏まえ、子どもを主体とする居場所づくりや世代間交流から、地域の中で子どもの居場所をつくることによる住民の意識やその必要性、地域にとってどのような影響があるのか、引き続き研究していく。

①なみカフェに関して

来年度もなみカフェを継続していく上で、コーディネーターとして運営について考えていく必要がある。今年度は子どもとの関係に重きを置き、なみカフェ全体の把握ができていなかったことは自分自身の課題である。そのため、スタッフ一人ひとりが心に思いをつまらせることを減らせるよう、思いの受容・傾聴と共有、またなみカフェの現状や打ち合わせを兼ねた話し合いの場を定期的に設けるようにしたい。

普段のなみカフェでは全体の動きの把握、役割分担などを気にかける。そして子どもたちの「体験」を増やせるような企画の働きかけとして、地区の行事との連携や伝統行事の取り入れなども考えたい。

また、並柳団地町会が各方面に取り上げられる機会が多いことにより、貧困というイメージがつくことに心を曇らせる声も挙がっている。なみカフェでも基本的に貧困という言葉は使っておらず、「いつでも誰でも来ていいんだよ」というメッセージを大切にしている。このことから、周りの先入観による生活のしづらさを考えていくことも課題である。

②全体的な取り組みに関して

庄内地区は子どもと地域住民が関わる機会が多いことが強みであり、地域の人からも「子どもと地域のお年寄りが関われる場をつくりたい」という声も挙がっていることから、世代間交流の場を今後も増やしていく必要がある。このような場の中で、高齢者から昔ながらの遊びや伝統文化を教わりながら、地域の人々の得意なことを活かせる場ともしたい。

子どもと地域の人々が関わる場から、子どもたちにとって身近な地域に信頼できる大人が増えることや、子どもの頃に楽しい思い出が増えれば自分の地域に愛着をもつことにも繋がると考える。そして日常的に挨拶を交わしやすくなれば、地域で子どもを育てるという一体感もよ

り一層芽生えるだろう。

7-2 地域での見守り体制の強化

今年度、独居高齢者の見守りが十分でないことが明らかになった。独居高齢者の個人情報には民生児童委員しか持っていないが、守秘義務があるため公開することができない。しかしながら、もしもの時地域で助け合うためには情報を持っていないと動けない場合もあるため、町会長はじめ地域の人々からもどかしいという声を聞くことがあった。中には自分で情報を得て、身近な地域の独居高齢者宅へ果物を持って訪問し、会話をしているという人もいる。

それでもまだ見守りから溢れている人はいるだろう。地域のサロンや福祉ひろばの活動などに出てくる人は良いが、そういった場に出てこない人が見守りから取り残されてしまう危険性もあることが課題である。また独居高齢者に限らず、地域で困っている人への見守り体制の強化も考え、新たな取り組みも必要である。そのため、日常生活で困りごとを抱えている人のニーズ発掘と、困っている人に対して“できること”を持っている人との連携を強化する。それに関して一つ、「出張サロン」を行いたいと考えている人がいる。そのためには民生児童委員や地域の人との連携・協力が不可欠であると話し、計画を練っている。その他、同じ地域に住む人々が安心して過ごせるよう、地域のニーズや課題に合わせてテーマを設定し、地域キーパーソンに向けて開く「キーパーソン講座」を並柳団地町会で来年度も継続する予定である(今年度3回実施)。さらに、地域の中での新たな居場所事業も始まろうとしている。

地域での新たな取り組みにつき、私のできることを考え、協力させていただくとともに、今後はより密に研究をしていきたい。

来年度は以上を軸として活動をしていく上で、今年度以上に地域づくりインターンとして庄内地区の研究をする意識を改めて高く持つ。今後も地域に顔を出しながら地域の人と話をしやすい関係になれるよう、また地域の人と人、社会資源を繋げる役目となれるよう、活動に取り組んでいきたい。そして、周りに相談・報告等を欠かさず、地域の人々の思いを第一に、一緒に地域づくりをしていきたい。

参考文献

- ・『子育て支援の創造 アクション・リサーチの実践を目指して』小木美代子、立柳聡、深作拓郎、星野一人著(学文社 2005年発行)
- ・『地域から生まれる支えあいの子育て』小出まみ著(ひとなる書房 1999年発行)

[資料]

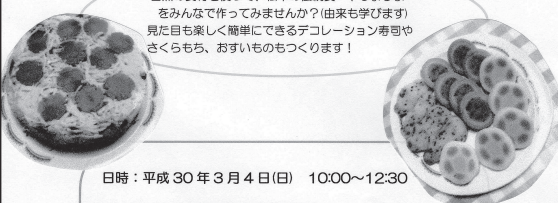
資料1 平成29年度なみカフェ参加状況

| 日にち | 保育園児 | 小学生 | 中学生以上 | 子ども合計 | スタッフ | 計 | 特記内容 |
|----------|------|-----|-------|-------|------|----|-----------|
| 4/1(土) | 0 | 3 | 1 | 4 | 6 | 10 | |
| 4/5(水) | 0 | 2 | 0 | 2 | 5 | 7 | |
| 4/18(火) | 0 | 5 | 2 | 7 | 7 | 14 | |
| 4/22(土) | 0 | 7 | 0 | 7 | 10 | 17 | さくらもち作り |
| 5/13(土) | 0 | 7 | 0 | 7 | 12 | 19 | 牛乳パック工作 |
| 5/20(土) | 0 | 5 | 0 | 5 | 12 | 17 | |
| 5/24(水) | 0 | 14 | 0 | 14 | 7 | 21 | |
| 5/31(水) | 0 | 10 | 2 | 12 | 12 | 24 | |
| 6/10(土) | 0 | 4 | 1 | 5 | 11 | 16 | フルーツポンチ |
| 6/24(土) | 1 | 9 | 1 | 11 | 9 | 20 | |
| 6/28(水) | 0 | 6 | 1 | 7 | 6 | 13 | |
| 7/1(土) | 1 | 9 | 2 | 12 | 18 | 30 | |
| 7/12(水) | 0 | 6 | 1 | 7 | 9 | 16 | |
| 7/19(水) | 0 | 11 | 1 | 12 | 8 | 20 | |
| 7/27(木) | 0 | 7 | 0 | 7 | 12 | 19 | |
| 7/31(月) | 0 | 4 | 0 | 4 | 9 | 13 | |
| 8/3(木) | 0 | 8 | 0 | 8 | 7 | 15 | |
| 8/9(水) | 0 | 7 | 2 | 9 | 15 | 24 | |
| 8/19(土) | 2 | 5 | 2 | 9 | 12 | 21 | ジュースゼリー |
| 8/21(月) | 0 | 5 | 0 | 5 | 10 | 15 | ピザ作り |
| 8/30(水) | 0 | 9 | 1 | 10 | 10 | 20 | |
| 9/6(水) | 1 | 7 | 1 | 9 | 7 | 16 | |
| 9/13(水) | 1 | 11 | 2 | 14 | 11 | 25 | |
| 9/18(月) | 3 | 12 | 1 | 16 | 17 | 33 | バスハイク |
| 9/27(水) | 1 | 12 | 1 | 14 | 8 | 22 | |
| 10/3(火) | 0 | 13 | 0 | 13 | 9 | 22 | |
| 10/11(水) | 1 | 9 | 1 | 11 | 7 | 18 | |
| 10/18(水) | 0 | 11 | 1 | 12 | 14 | 26 | |
| 10/28(土) | 1 | 12 | 1 | 14 | 13 | 27 | |
| 11/1(水) | 0 | 8 | 1 | 9 | 15 | 24 | |
| 11/8(水) | 1 | 13 | 1 | 15 | 9 | 24 | |
| 11/15(水) | 1 | 14 | 1 | 16 | 12 | 28 | |
| 11/25(土) | 1 | 13 | 1 | 15 | 15 | 30 | ふきん作り |
| 12/6(水) | 0 | 16 | 1 | 17 | 16 | 33 | |
| 12/9(土) | 2 | 9 | 1 | 12 | 12 | 24 | |
| 12/13(水) | 2 | 14 | 1 | 17 | 9 | 26 | |
| 12/20(水) | 2 | 14 | 1 | 17 | 16 | 33 | クリスマス会 |
| 12/28(木) | 2 | 17 | 2 | 21 | 24 | 45 | おもちつき |
| 1/6(土) | 2 | 15 | 1 | 18 | 16 | 34 | まゆだま作り |
| 1/17(水) | 1 | 11 | 0 | 12 | 17 | 29 | |
| 1/24(水) | 0 | 5 | 0 | 5 | 11 | 16 | |
| 1/31(水) | 2 | 11 | 1 | 14 | 12 | 26 | |
| 2/14(水) | 2 | 12 | 0 | 14 | 15 | 29 | |
| 2/21(水) | 2 | 11 | 2 | 15 | 15 | 30 | |
| 2/28(水) | 2 | 14 | 1 | 17 | 11 | 28 | |
| 3/7(水) | 2 | 13 | 1 | 16 | 13 | 29 | |
| 3/14(水) | 3 | 13 | 1 | 17 | 15 | 32 | |
| 3/20(火) | 1 | 14 | 0 | 15 | 22 | 37 | たこやきパーティー |
| 3/22(木) | 1 | 10 | 1 | 12 | 10 | 22 | |
| 3/27(火) | 2 | 10 | 1 | 13 | 15 | 28 | |

資料2 公民館講座「伝統食とひなまつり」案内
チラシ

家でもできる！伝統食(でんとうしょく)とひなまつり
「やしょうま」と「デコレーション寿司(ずし)」をつくろう

自然の食材を使って、松本の伝統食“やしょうま”
をみんなで作ってみませんか？(由来も学びます)
見た目も楽しく簡単にできるデコレーション寿司や
さくらもち、おすいものもつくります！



日時：平成30年3月4日(日) 10:00~12:30
場所：庄内地区公民館 料理実習室
対象：・庄内地区に住む小学生とその親(祖父母)の2人1組
(小学4~6年生は子どもだけの参加もできます)
・小学生未満のお子様は保護者同伴なら大丈夫です
定員：先着12組
費用：1人あたり300円

申し込み：2月27日(火)までに庄内地区公民館(☎24-1811)
へお電話ください。

*そのほか、気になることがありましたらご相談ください。

庄内地区公民館
担当：中島